

(第3種郵便物認可)

誌名から「十」を除いた
「新潮45」は、「65+」と
したらしいような老人臭い

雑誌になりつ
つあるけれど

七月号の村松
暎「嘘つけ

父・村松梢風
の懺悔録」は

圧巻だった。
梢風の女遍歴

を息子として見つめてきた

村松教授(慶大・中国文学)

が自伝「梢風物語」と「梢

風懺悔録」をこのたび読む

機会を得て、改めて父親を
回想しているのだが、息子

の立場から親父の凄絶(せ

いぜつ)な色恋のディテー

ルを検証しているだけに、

筆先の緊張感も伝わってく

る。

筆者の村松暎は、男ほか

りの四人の子供の末っ子

で、すぐ上の三男は先年物

故した「教育の森」の村松

喬(毎日新聞)、いま流行

「蕉蔵と孤独」(中央公論

社)という名著を書き、現

作家の村松友規の叔父にも
当たる。

村松教授は、吉原の花魁

(おいらん)に通いつめた

り、上海の社交ダンス教師

に入れあげた父親とは違っ

て、大層律義な中国文学者

だが、一徹なところは父親

ゆずりで、文革で日本のイ

ンテリが毛沢東万歳を叫ん

でいたときに、「毛沢東の

ける作家は当今まれなら

ん。(荷風の末えい)

ん。

父をあばく

社)という名著を書き、現
住でもミニコミで執拗(し
つよう)に「朝日新聞」批
判を続けている硬骨漢でも
ある。

それにしても、死の床に
あつてさえヌードタンサー

を恋したという梢風の女狂
いのために、自分の母親も

下宿先の娘も病気をうつさ
れてひどく苦しんだとい

うことまであばかれてい
る。このように父親像を描

ける作家は当今まれなら
ん。(荷風の末えい)